

令和元年6月28日現在

機関番号：31106

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2014～2018

課題番号：26284060

研究課題名（和文）発達障害の言語行動モニター・コーパスの構築と診断補助ガイドラインの作成

研究課題名（英文）Constructing a Monitor Corpus of the Spoken Language of Autism Spectrum Disorder and drawing up Diagnostic Guidelines

研究代表者

加藤 澄（Kato, Sumi）

青森中央学院大学・経営法学部・教授

研究者番号：80311504

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 9,500,000円

研究成果の概要（和文）：自閉症スペクトラム障害（ASD）と統合失調症は、社会適応に困難を持つ点で共通性があるが、社会的行為である対人的相互作用における両者の言語行動の違いと共通点を明らかにするために、そしてASD児/者の言語行動の系統的・総体的マッピングを実現するために、ASD児/者及び定型発達児/者の話し言葉のコーパスを構築、選択体系機能言語学の枠組みによる日本語の語彙-文法資源の選択網を作成、構築されたコーパスより、ASD児/者と定型発達児/者が選択する語彙-文法資源を測定し、定型発達児/者との比較よりその逸脱度を算出し、その言語選択網のマッピングを行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

特定の精神疾患やASDのような脳機能の先天異常の話し言葉の意味付与されたコーパスは過去にないため、本研究で構築したコーパスにより大量のデータを基にした言語行動の研究が可能となる。

ASDの言語研究は行われてはいるが、本研究のようにシステムネットワークに従って、体系的アプローチから総体的にASDの言語行動の解明をはかる先行研究はない。本研究で作成するシステムネットワークは、fMRIなどの脳機能画像法による言語脳解明の準備基盤として大きく貢献するものである。

特定精神疾患及び先天的脳機能不全の言語行動の研究は、正常者の言語行動を明らかにすることにつながり、語用論の理論構築への貢献となる。

研究成果の概要（英文）：A common point of autism spectrum disorder (ASD) and schizophrenia is that individuals affected by either condition have difficulty in social adaptability. This study focused on the linguistic behavior of individuals with ASD in order to investigate two points: (a) their differences from and commonality with schizophrenics regarding linguistic behavior in interpersonal interactions, and (b) the holistic mapping of the lexico-grammatical choices by individuals with ASD from the system network. Toward this end, (1) constructing the corpus of the spoken language of both individuals with ASD and their typically developed (TD) counterparts, (2) mapping the general system network of the Japanese language in the theoretical framework of systemic functional linguistics, and (3) based on the corpus constructed, holistically mapping the lexico-grammatical choices of individuals with ASD by measuring their deviation from the choices of TD counterparts, are implemented.

研究分野：言語学

キーワード：自閉症スペクトラム障害 コーパス SFL 選択体系機能言語学 ASD 談話分析 自然言語処理 語用論的障害

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

#### (1) 自閉症スペクトラム障害と統合失調症の臨床知見としての共通点

自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorder, 以後 ASD) と統合失調症は、それぞれが異なる症候と臨床経過を持つ先天的発達障害と精神疾患である。しかし、両者は社会適応に困難を持つ点において共通性を有している。ASD には、社会的コミュニケーション及び対人的相互作用における持続的障害が見られるが、統合失調症もまた同様に他者との関係構築に困難が指摘される社会性障害が見られる。こうした共通点から、つい最近まで誤診が少なからず見られた。結果、ASD 者が、統合失調症と診断され、不必要な投薬を受ける例が少なくなかった。しかし近年、ASD 児/者の数の急速な増加に伴い、ASD の研究の進歩とともに、誤診率は低くなってきている。本研究は、言語学の立場から ASD と統合失調症の言語行動の共通点と相違点を明らかにする研究の一貫である。

#### (2) 語用論的障害の研究アプローチの現状

社会適応に困難を持つ原因として、ASD と統合失調症の両言語行動において、ワーキングメモリ、注意、エピソード記憶、また情動的表情認知、心の理論、共感といった認知機能に低下がみられるといった研究が増えてきて、共通した認知機能障害が内在することが報告されてきている。特に、ASD の中心的な障害は、脳機能不全による一定の認知機能の欠損からくる語用論的障害である。言語使用には、認知機能が反映されるが、上述の様々な認知機能不全が ASD 児/者と統合失調症者の言語使用に反映され、それが語用論的障害として発現するというのが、臨床サイドの研究者では一致した見解である。このように臨床家は、語用論的障害を複合的な要因がからむ総体的観点から捉えるが、言語学者や語用論学者の考察には、こうした臨床上の要素は反映されず、言語学的特徴や対人的領域の問題として処理される傾向がある。この点に、適切な介入が切羽詰まったニーズとなる臨床サイドと、言語学サイドとの立脚点の相違がある。

本来、語用論は言語学の基礎分野であり、従って用いられる術語は言語学や社会科学に起源を持ち、一般論として人間行動の表象モデルに焦点を置いて論じられてきたため、臨床現象に適用しようとした時に、臨床サイドの研究者に混乱を生じさせる傾向がある。

多くのコミュニケーション障害は、特定の認知・言語機構における機能不全からきているであり、相互作用の相手との間に生じる語用論的障害は、認知的、記号的、感覚運動性機構上の機能不全の帰結であると捉えられる。認知は神経学上の、あるいは脳機能上の産物として発現するわけであり、当然、語用論的障害が、神経学との関連で議論される場合が多いことは自明である。そのため「neuropsycholinguistics」という用語が、臨床領域ではしばしば用いられる。よって、語用論的障害は、神経学、認知、言語、社会、行動学といった学際的な視点から、総体的に論じられなければならない現象である。しかし現状は、最も現象に近い立場に位置する言語学のサイドに、語用論を臨床の見地から論ずることへの無関心があることは否めない。本来であれば、言語学者と神経学者など学際分野の研究者が手を携えて解明にあたることが、語用論的障害の解明・対処へ大きく寄与することにつながり、また言語学サイドでも、神経学から得られる知見が、語用論の理論構築に大きな発展をもたらすという認識が求められる。

#### (3) 脳機能の解明

近年、fMRI などを用いた機能画像法をはじめとする脳神経科学の発展によって、ASD の脳内言語処理機能について、解明が試みられている。解明にあたっては、事前研究として異なるレベルでの言語機能を系統的に検討することが、必須要件である。

#### (4) アングロサクソン言語文化中心主義

国際レベルで発表される ASD の言語行動の研究は、英語話者に関するものが圧倒的に大きな割合を占める。ASD の言語行動に関する先行研究は、英語話者を対象にした観察結果が圧倒的に多く、それがあたかも普遍的な現象であるかのように扱われている。しかしそもそも、それぞれの言語は、社会文化的コンテキストを反映して成り立っているため、英語話者の言語行動には、必然アングロサクソンの社会文化が反映される。ASD の言語行動の逸脱を考える時、言語によって逸脱現象が隠れたり、逆に明らかになったりするため、異文化語用論的な違いを明らかにして、その中で共通するものを 普遍現象とすべきという立脚点が臨床、重要な現象の見落としを防ぐ。よって、英語以外の言語話者に英語話者とは異なる言語行動が観察されることは全くありうることである。多様な言語データから観察点を求めることが必要である。

### 2. 研究の目的

本研究は、以下を主目的として実施された。

(1) ASD、統合失調症両者とも社会性に障害がみられるという共通した知見があるが、両者はその他の症状において明確に異なる特徴をもつ。本研究では、社会的行為である対人的相互作用において、その言語行動における違いと共通点をあきらかにすることを目的の一環とし、二者のうち、ASD に焦点を置いて、ASD 児/者とコントロール・グループとしての定型発達児/者の話し言葉をコーパス化し、2 群の語彙-文法資源の選択の分析を基に、ASD の言語行動の諸特徴をマッピングする。

(2) 語彙-文法資源の精緻なマッピングは、fMRI などを用いた脳機能画像法をはじめとする脳神経科学による脳内言語処理機能の解明のため有用である。本研究では、こうした脳機能の解明のための実験設計に供することを目的として、言語行動の精緻なマッピングを実現する。

(3) ASD のような脳の先天異常や統合失調症などのような特定精神疾患の言語行動の研究の意

義は、健常者が、日々、社会の中でどのように言語を使っているかを明らかにし、語用論についての理論構築に寄与するところにある。本研究はその一環である。

### 3. 研究の方法

- (1) 日本語話者である ASD 児/者及び定型発達児/者の話し言葉のコーパスを構築する。
- (2) 選択体系機能言語学(Systemic Functional Linguistics: 以後、SFL)の理論的枠組みによる日本語の語彙-文法資源のシステムネットワーク(system network:言語選択網)をマッピングする。日本語を対象としたシステムネットワークの構築は開発途上で、整備し発展させる必要がある。
- (3) (2)でマッピングされた日本語の語彙-文法資源のシステムネットワークに基づき、(1)で構築されたコーパスによるデータを基に、ASD 児/者と定型発達児/者が選択する語彙-文法資源を計量し、ASD 児/者の言語資源選択の逸脱度を、定型発達児/者との比較によって数値化する。得られた数値に基づき、ASD 児/者の語彙-文法資源の選択網をマッピングする。
- (4) ASD 児/者の言語行動の語彙-文法資源の選択網のマッピングを、統合失調症者のそれと対照させ、両者の違いと共通点を定義する。<sup>1</sup>

#### 手順

【データ収集】ASD 児/者と定型発達児/者の計 2 群がデータ収集の対象者である。まず、以下のパイロット・スタディを行い、収集データとする最終タスクを決定した。

【タスクの考案とそのパイロット・スタディの実施】ASD 児/者 20 例、定型発達児/者 20 例を対象に、タスク 8 案について、2 群に対しパイロット・スタディを実施し、その結果に検討と修正をはかった上で、最終タスクを決めた。以下、最終タスクである。基本的に統合失調症者へ課した課題と整合性を持たせたタスク案となっている。\*但し、タスクによっては、どちらかのグループに適用不可となったものもあった。

1) 面接者によるインタビュー(質問項目を課して自由に発話させる): 質問 50 項目(ライフ・ヒストリーに関する口頭作文など)

2) 文字のない絵本を物語らせる。

3) 風景の絵カード(5 枚)を見せて、それについて面接者との対話の中で自由に語らせる。

4) 単数から複数の人物が何かに従事している写真を見せて、そこで進行している事態と人物の心的状況を語らせる(10-15 枚)。

\*物理的な因果関係と人物の意図の推論がどの程度なされるか、また人物の感情の推論について言及するかどうかを見る。登場人物の心的状態を推測する必要がある心の理論を問う物語と、記述された情報に推論を要するが、登場人物の心的状態を推論する必要のない事実の記述物語間で、違いが見られるかどうかの比較を行うことが目的である。

5) 歯の磨き方を説明させる。

\*ADOS<sup>2</sup>の中にある査定項目の 1 つで、日常の決まり事となっている一連の行動について、報告・説明ができるかどうかをみる。

6) 対話のロールプレイの空欄を埋めさせる。

\*語用的状況を適切に捉えられるか、また、思考の逸脱がみられるかどうかをみる。

【コーパス収納サンプル数】設定したタスクを ASD 児/者 100-130 名及び定型発達児/者 50-70 名に課し、両群合わせてのべ約 900 例の音声ファイルを収集した。得られた音声データを逐語記録化し、コーパス化するにあたっては、固有名詞や個人が特定できる情報は、記号化、または削除した。

【SFL の理論的枠組みによるアノテーション用辞書の作成】SFL は、機能主義(functionalism)に立つもので、発話・文を一方向からではなく、重層的に分析する理論である。これはメタ機能を通して可能となる。以下が SFL の 3 メタ機能の定義と作成した辞書の言語資源である。

1) 観念構成的メタ機能: 言語による対人的相互作用において、話し手の外的内的世界の経験を解釈・表出する機能を担う意味選択網で、言語による相互作用によって作り出される現実に対する解釈のことを言う。作成辞書: 過程構成・起動的解釈による過程

2) 対人的メタ機能: 対人的相互作用における話し手の発話役割、心的姿勢を表出する機能を担う意味選択網である。言語を通して、相互作用者は、提言と命題、態度、位置あるいは地位、関与が交渉される交換(exchange)を行う。作成辞書: モダリティ・態度評価・程度評価・オノマトペ

3) テキスト形成的メタ機能: 言語行動をテキストとして成り立たせるための組織化要素の機能を担う意味選択網で、テキスト全体の首尾一貫性を構成するための仕組みを扱う。

分析手法: 辞書ではなく、CBAP<sup>3</sup>(Clause Boundaries Annotation Program)を用いて分析を行った。その他、SFL のメタ機能の範疇外である表象構造の辞書を作成した。

【データのコーパス化】データベースとして、SFL の理論的枠組みからの情報がアノテーショ

<sup>1</sup> 加藤による先行研究では、科学研究課題 No.26590161 で、統合失調症の話し言葉のコーパスを構築している。

<sup>2</sup> Autism Diagnostic Observation Schedule. 診断の金字塔とされる診断補助ツール。臨床用使用と研究用使用の資格があり、論文等への発表には研究使用の資格が必要。代表加藤は、両者の資格を取得している。

<sup>3</sup> 日本語節境界検出プログラム(丸山岳彦, 2004)

ンされている。本コーパスは、従来のコーパスと異なり、意味付与がなされ、得られる情報は高度に精緻化されたものである。

#### 4. 研究成果

##### (1) アノテーション・ツールの開発

SFLに基づく複雑な意味付与を効率よく実現するためのアノテーション・ツールを開発した。本コーパスは、SFLの理論的枠組みによる意味付与(システムネットワークのマッピングに必要な情報のアノテーション)がなされた従来の仕様とは異なるコーパスである。アノテーション、修正作業、テキストの情報更新と格納を一貫したシステムの中で効率よく行うためのシステムの構築が実現された。

##### (2) 日本語のシステムネットワークの作成

ある意味を示したい場合に、語彙-文法資源にいくつか選択肢があり、人は発話の瞬時に言語資源の選択網から選択していくわけであるが、SFLでは、これを選択体系(choice system)として、理論の中核としている。つまり、交替可能ないくつかの選択網の中から、いずれかを選んで言語表現が形成されるわけで、選択体系とはその選択項の集合のことを言い、SFLではこれをシステムネットワークと呼ぶ。英語のシステムネットワークは先行研究ですでに構築されているが、日本語については未開拓のため、本研究では、日本語の言語体系を網羅するシステムネットワークのマッピングとして、対人的メタ機能のマッピングを行った。構築されたシステムネットワークを、ASD者と定型発達者の言語行動の比較スケールとした。

##### (3) 言語分析

言語分析計量データより、定型発達者との比較において、ASD者に以下の点が観察され、神経認知学・言語学的視点からの分析を通して、言語行動上の特徴を定義した。

【対人的メタ機能からの分析】 モダリティ:話し手の対人的心的距離観 / 話し手の経験世界の解釈の確信度 / 対人的相互作用における話し手の社会性 評価表現:話し手の評価言語の使用から、事象の認知・評価の偏向あるいは特徴 / 抽象語の理解度の低下 / 情動的共感の欠損と偏向 交渉詞:話し手の対人的交渉性の特徴と社会性の弱体化、が観察された。

【観念構成的メタ機能からの分析】 過程構成:患者の経験世界の解釈・構築の偏向 / 起動的解釈からみた話し手の経験世界の解釈の視点の傾向性。

##### 【テキスト構成的メタ機能からの分析】

節構造:統語構造と統語能力。定型発達者との比較において、ASD者に統語能力の低下が観察された。

##### (4) ASDのシステムネットワークの構築

ASDの語用論的障害は、システムネットワークからの選択の逸脱性に表出する。コーパスによって得られた計量データより、SFLの理論的枠組みによる語彙-文法資源のシステムネットワークを基盤として、ASD児/者が選択する各語彙-文法資源の逸脱度をコントロール・グループである定型発達児/者との比較によって測定し、最終的にASD児/者の選択網をマッピングする。ASD児/者には選択可能性の低い回路があるなど、統計的有意性に基づく逸脱した言語資源の選択が見られることが確かめられた。この選択網のマッピングは、脳機能解析のための実験構築に大きく貢献することが期待できる。

なお、本コーパスは、データの拡張をはかるために、モニターコーパスとして、データ収集を継続し、アノテーション作業及びそれをコーパスに組み込む作業が、引き続き継続されている。標本数を可能な限り大きくすることで、得られる結果の信憑性を高めるためである。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計22件)

1. 加藤澄. 2019. 「自閉症スペクトラム障害の語用論的障害から捉える認知神経学的/言語的現象としてのモダリティ」単著『機能言語学研究』第9号. 査読有.(印刷中)
2. Adachi Masaki, Takahashi Michio, Takayanagi Nobuya, Yoshida Satomi, Yasuda Sayura, Tanaka Masanori, Osato-Kaneda Ayako, Saito Manabu, Kuribayashi Michito, Kato Sumi, Nakamura Kazuhiko. 2018. "Adaptation of the Autism Spectrum Screening Questionnaire (ASSQ) to Preschool Children." PLOS ONE 13(8): e0203254. 査読有.
3. 加藤澄. 2018. 「自閉症スペクトラム障害者の発話における交渉詞「ね」と「よ」の使用から検証する対人観」単著.『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第20号:85-101. 査読有.
4. 加藤澄. 2018. 「自閉症スペクトラム障害をめぐる現況と言語遅滞対応モデルの導入」共著.『青森中央学院大学地域マネジメント研究所研究年報第14号』65-80. 査読無.
5. 飯村龍一. 2018. 「児童文学の文体と外国語教育」『文体論研究』第64号:81-82. 査読有.
6. 角岡賢二. 2018. 「節談説教の談話構造分析」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』第27巻:57-69. 査読有.
7. 加藤澄. 2017. 「自閉症スペクトラム障害者の物語絵本のナラティブから検証する認知的共感の欠損」(単著)『機能言語学研究』第9号:97-114. 査読有.
8. 飯村龍一. 2017. 「物語テキストにおける問題解決プロセスの定式化にむけて—問題解決者としての主人公を中心に」『LEORNIAN』第21号:1-18. 査読有.

9. 飯村龍一. 2017. 「物語テキストにおける感情表現分析」『LEORNIAN』21:19-36. 査読有.
10. 中村和彦. 2017. 「発達障害 第2章 疫学 ADHD の疫学 - 最近注目のトピックスと有病率について - 」最新医学醫學別冊 診断と治療のABC, 130. 47-52. 査読無.
11. 角岡賢一. 2016. 「機能文法による日本語叙法体系分析」『龍谷紀要』第37巻: 37-53. 査読有.
12. 飯村龍一. 2016. 「物語テキストにおける会話ユニットのはたらき—テキスト構築の視点から」『LEORNIAN』第20号: 3-22. 査読有.
13. 飯村龍一. 2016. 「子供向けの物語における文法的メタファーのはたらき」『英語学・英語教育研究』第22巻 第36号: 3-30. 査読有.
14. 斎藤まなぶ・中村和彦他. 2016. 「5歳児発達健診における発達障害の疫学」『日本生物学的精神医学会誌』第27巻 第2号: 60-64. 査読有.
15. 斎藤まなぶ・中村和彦他. 2016. 「5歳児健診の現状と課題」『児童青年精神医学とその近接領域』第57巻 第2号: 254-259. 査読有.
16. 斎藤まなぶ. 2016. 「自閉症スペクトラム障害の早期発見 - 5歳児健診 - 」『臨床心理学』第16巻 第2号: 145-150. 査読有.
17. Kato, Sumi. 2015. “What does linguistics contribute to the research in clinical psychology and/or psychiatry?” Proceedings of the 17th Annual Conference of the Pragmatics Society of Japan. Vol.12. 339-346. 査読無.
18. Kadooka, K. 2015. “On the Asymmetric Nature of Polarity in Japanese Modality” 『龍谷大学国際センター研究年報』第24巻: 75-84. 査読有.
19. 加藤澄. 2015. 「感情評価語彙-文法資源の変化特定が示す個体発生としての言語発達 - 心理療法へ適用して」(単著) 『機能言語学研究』第8号: 161-182. 査読有.
20. 加藤澄. 2015. 「SFL システムネットワークによる日本語モダリティの再構築」(単著) 『龍谷大学国際社会文化研究所紀要 17号』123-143. 査読有.
21. 飯村龍一. 2014. 「フィクション・テキストにおける conflict の概念分析」『LEORNIAN』18: 21-38. 査読有.
22. Anitha, A., Thanseen, I., Nakamura, K., Vasu, MM., Yamada, K., Ueki, T., Iwayama, Y., Toyota, T., Tsuchiya, K.J., Iwata, Y., Suzuki, K., Sugiyama, T., Tsujii, M., Yoshikawa, T., Mori, N. 2014. “Zinc finger protein 804A (ZNF804A) and verbal deficits in individuals with autism”. Japan Psychiatry Neuroscience. Vol. 39: 294-303. 査読有.  
[学会発表](計15件)
1. T. Hirota, M. Saito, Y. Sakamoto, M. Adachi, M. Takahashi, A. Osato, Y. S. Kim, B. L. Leventhal, A. M. Shui, S. Kato and K. Nakamura. 2019. "Cumulative Incidence of Autism Spectrum Disorders," Annual Meeting of International Society for Autism Research.
2. Adachi, M., Takahashi, M., Takayanagi, N. Yasuda, S., Sakamoto, Y. Tanaka, M., Osato, A., Kato, S., Saito, M., and Nakamura, K. 2018. "Discriminant validity of the autism spectrum screening questionnaire parent form to preschool children." International Society for Autism Research Rotterdam.
3. Sakamoto, Y., Saito, M., Tsuchiya K.J., Osato, A., Kato, S., Matsubara, Y., Mikami, T., Adachi, M., S, Takahashi, M., Yasuda, S., Nakamura, K. 2018 "Gender Difference of Gaze Fixation Patterns in 5-Year -Old Children -the Usefulness of Early Detection of Girls with Autism Spectrum Disorder" International Society for Autism Research Rotterdam.
4. 斎藤まなぶ. 2018. 「子どものこころの臨床研究トピックス、コホート研究から脳画像研究まで S63-2 乳幼児健診、学校調査を用いたコホート研究」第114回日本精神神経学会学術総会.
5. 中村和彦. 2018. 「青年期・若年成人期の ADHD と ASD の薬物療法 S9-3. 自閉スペクトラム症の治療 薬物療法の役割」第28回日本臨床精神神経薬理学会・第48回日本神経精神薬理学会合同年会.
6. Kadooka, K. 2017. “A Systemic Analysis of the Modality Systems of English and Japanese”. The 23rd International Symposium of the Theoretical and Applied Linguistics.
7. Kadooka, K. 2016. “A Study of Japanese Modality using a Corpus”. 8th Conference on Corpus Linguistics.
8. Nakamura, K., Thanseem, I., Tsujii, M., Matsumoto, N. 2016. “CNV Analysis and Exome Sequencing in Japanese Autism Spectrum Disorder Subjects”. 2016 International Meeting for Autism Research.
9. Saito, M., Takayanagi, N., Adachi, M., Osato, A., Yasuda, S., Masuda, T., Tanaka, M., Yoshida, S., Kuribayashi, M., Nakamura, K. 2016. “Prevalence of Autism Spectrum Disorder in a Japanese Community-Based Population Sample of Five-Year-Old Children”. International Meeting for Autism Research.
10. Saito, M., Nakamura, K. 2016. “Gaze Fixation Patterns in Children With Autism Spectrum Disorder and Typical Development Screening From the Japanese Community Based 5-Year-old Children”. The 55th American College of Neuropsychopharmacology (ACNP).
11. 斎藤まなぶ・下山修司・吉田恵心・坂本由唯・大里絢子・高柳伸哉・足立匡基・安田小響・

- 栗林理人・中村和彦. 2016. 「5 歳児の 自閉スペクトラム障害における V L D L、I G F-1、オキシトシンの診断有用性の検討 (2 I-18)」第 112 回日本精神神経学会学術総会.
12. 斉藤まなぶ・大里絢子・吉田恵心・高柳伸哉・足立匡基・安田小響・田中勝則・増田貴人・栗林理人・中村和彦. 2016. 「Gazefinder (Ka-o-TV)を用いた 5 歳児の ASD 特製の検討」第 57 回日本児童青年精神医学会.
13. Kadooka, K. 2015. "The Meaning and Function of the English Intonation Systems". 36th Annual International Convention, TESOL Greece.
14. 角岡賢一・加藤澄・飯村龍一・福田一雄・五十嵐海里. 2015. 「機能文法による日本語モダリティ研究」日本機能言語学会春期ワークショップ.
15. Kato, Sumi. 2014. "What does linguistics contribute to research in clinical psychology and/or psychiatry?" Symposium of the 17th Annual Conference of the Pragmatics Society of Japan: Speaker: Topic "Clinical Discourse".
- 〔図書〕(計 7 件)
1. 加藤澄他. 2019. 「精神分析的心理療法(サリヴァン)に対する分析-Sullivan 遺産を原点として、テクノロジーを活用する」『臨床言語心理学の可能性』(分担執筆) 51-76. 京都: 晃洋書房. (印刷中)
2. 加藤澄. 2019. 「自閉症スペクトラム障害と社会文化的言語背景」『新時代で変化するビジネス境界と社会諸相の展望』(分担執筆) 39-63. 東京: ぎょうせい.
3. 角岡賢一. 2018. *A Linguistic Study of Kamigata Rakugo Stories*. Shouhakusha.
4. 加藤澄. 2016. 『サイコセラピー臨床言語論 - 言語研究の方法論と臨床家の言語トレーニングのために』(単著) 東京: 明石書店. 333 頁.
5. 角岡賢一・加藤澄・飯村龍一・福田一雄・五十嵐海里. 2016. 『機能言語学による日本語モダリティ』(共著) 東京: くろしお出版. 336 頁.
6. 中村和彦. 2016. 「大人の ADHD 臨床アセスメントから治療まで」『大人の ADHD 臨床: アセスメントから治療まで』東京: 金子 書房. 196 頁.
7. 加藤澄. 2014. 「グローバル・コミュニケーションのスタンダード化 vs. 言語文化の保持」『点描 - 変わりゆく現代社会』(分担執筆) 84-107. 東京: ぎょうせい.

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名: 斉藤 まなぶ

ローマ字氏名: SAITO, Manabu

所属研究機関名: 弘前大学

部局名: 医学部附属病院

職名: 講師

研究者番号(8桁): 40568846

研究分担者氏名: 中村 和彦

ローマ字氏名: NAKAMURA, Kazuhiko

所属研究機関名: 弘前大学

部局名: 医学研究科

職名: 教授

研究者番号(8桁): 80263911

研究分担者氏名: 飯村 龍一

ローマ字氏名: IIMURA, Ryuichi

所属研究機関名: 玉川大学

部局名: 経営学部

職名: 教授

研究者番号(8桁): 80266246

研究分担者氏名: 角岡 賢一

ローマ字氏名: KADOOKA, Kenichi

所属研究機関名: 龍谷大学

部局名: 経営学部

職名: 教授

研究者番号(8桁): 70278505

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。